

平成15・16年度
「帰国・外国人と共に進める教育の国際化推進地域」最終報告書

都道府県名：大阪府

市区町村名：松原市

研究主題：地域・未来・ともに歩む

～多文化共生の町づくり・学校づくりをめざして～

(趣旨)：地域の国際化が一層進展し、ますます多くの外国人が地域で暮らすことが予想される中、すべての人の人権が大切にされるとともに、言葉や文化、習慣の違いを認め合いアイデンティティを保ち合いながら共生する地域社会の形成が重要な課題となっている。このような状況を踏まえ、帰国・外国人児童生徒の個に応じた特色ある教育指導のあり方及び帰国・外国人児童生徒とその他の児童生徒との相互啓発を通じた国際理解教育のあり方について実践研究を行う。

国際化推進地域の概要

1. 平成16年9月1日現在の在籍児童生徒数

帰国児童生徒数	22人
中国等帰国児童生徒数	42人
日本語指導が必要な外国人児童生徒数	43人

「帰国児童生徒」欄は、海外に1年以上在留した人数

2. 地域の特色(帰国・外国人児童生徒の分布状況等の概要)

本市は、大阪府南部に位置し、大阪近郊の市町村や他府県からの転入者も多く、人口約13万人の典型的な郊外都市として発展してきている。また、昭和60年ごろから、市内の府営団地を中心にして、中国等からの帰国者が増加しており、今年度の中国等帰国児童生徒は、小学校で4校(15校中)28人、中学校で5校(7校中)14人で、また、韓国・朝鮮、ブラジル、フィリピン等の国籍を有する児童生徒を含めると85人(平成16年5月1日現在)が、市内の小中学校で、日本人児童生徒と共に学んでいる。なお、現在松原市には、21カ国約1,400人の外国人の方が在住している。

3. 帰国・外国人児童生徒の実態(母語、在日期間、日本語能力の程度、学校生活の適応状況等の概要)

センター校の状況

2年生で、2年前に日本へ来たばかりの児童Aがいる。1年生では一からの日本語指導と学校への適応指導が必要であった。日本語が全く分からないことから来る子ども同士のトラブルも多く、子どもの思いを集団に返す仲間づくりが不可欠であった。2年生になり日本語の習得も進み少し落ち着いてきているものの引き続いての支援・指導が必要である。

1歳で帰国した6年生、2歳で帰国した2年生とAを除く15名の児童は日本生まれである。どの家庭でも日本語の会話の方が増えてきており、ほとんどの子どもたちは中国語を忘れてきている。日本語も上手に話される家庭も増えてはいるが、どの家庭も両親は主に中国語で会話をしている。そのため親子のコミュニケーションが取りにくくなっている家庭もある。また、保護者は学習言語(読み書き)の習得は十分でなく、学校での学習のフォローを家庭に期待することは難しい。

2年生で重い障害を持った子どもBがいる。学級・養護学級・家庭・医療機関等とも連携しながら、指導に当たっていく必要がある。

日本の学校で1年生の経験が初めての家庭が二家庭ある。今までも1年生の保護者

がハーモニカやカスタネット、給食のナフキン、時間割の見方等がわからなかったり、お弁当の作り方で悩んでおられたりした。持ち物や、学校のシステムなど、保護者にきめ細かく説明していかなければならない。

どの子も、日本語の日常会話の習得は比較的進んでいるが、学習言語になると大きなつまずきを見せる。例えば、中国語には助詞がほとんどないためか、助詞の使い方が理解しにくい。また、高学年になると、長文の読解や、理科・社会の内容理解も苦手となってくる。さらに、お宮参りやお墓参り、海に行ったことがなかったり、日本人なら常識的な歴史上の人物や、政治の仕組みなど全く知らないことが多い。昨年度末に実施した全校一斉の日本語文法テストや今年度行った日本語力テストの結果から、ほとんどの帰国・渡日児童の相対的位置が、普通のテストより低位であったことは、帰国・渡日児童の持つ課題を端的に示している。

センター校以外の小中学校の状況

(小学校)

中国語で家族と会話ができる児童は少なく、中国語をある程度は聞きとれても、日本語で答えている状況である。保護者が日本語の語彙が少なく、児童の中国語の語彙も少ない場合、意思の疎通がうまくとれにくい家庭もある。

児童の日本語での日常会話は可能で、概ね不自由なく学校生活を送っているが、家庭での会話状況に応じて、学習言語の課題は多い。

発音だけで、自分の知っているものをイメージし、全く違う事や違う物を浮かべている場合がよくある。音訓のどちらで読めばよいのか迷うことも多い。歯ブラシ粉：歯ブラシと歯磨き粉が一緒になっていたり、「リレー」を「ビレー」と思いこんでいたり、日常生活によくでてくる物の名前と実物が合っていないものが多い。実物を見せたり、イラストや本等で確認していかなければならない。じゅんじょ じゅんじょう, ばしょ ばしょう, きんじょ きんじょう, 戸 とう, 図書館 とし しょうかん, 教室 きょうしつ, さいしょ さいしょう, 読書 どくしょう, 京都や金魚、勉強の読み仮名も「う」がいるか迷う。

入学以前に、中国語の会話が主であった家庭の児童には、「う」が必要な所が抜けたり、要らない所に入れたりすることが、非常に多い。仮名テストの実施や、はっきりと発音をさせることで、正しく表記できるように、また辞書のひき方等とあわせて指導を続けているが、高学年になっても頻りに読みがなをまちがえる現実がある。

何度も音読練習し、言葉の意味を学習した文章は読みとれるが、初めての文章やあまり時間をかけていない長文を読み取る時、語彙の不足から問題の意味も理解しにくい。

カタカナで表記する言葉も、日本語を基準にした外来語であるので、継続的な指導が必要である。

障害のある児童については、発達段階をふまえながら、ひらがな習得以前の言葉の獲得や日常会話につなげる指導が必要である。日本と中国を行き来してきたので、中国語で伝えてもらうほうがわかる場合もあり、支援通訳の方の協力も大切である。

(中学校)

現在在籍する中国からの帰国生は大半が幼少のころ帰国しており、日常会話としての日本語の習得は一定程度なされている。しかし、カタカナによる表記、拗音・促音の発音とその表記及び日本固有の慣用句、ことわざなど理解していない事項も多い。また国語における長文の読解、自分の意志を論理立てて日本語で説明することを苦手としている。教科特有の専門的用語の理解が難しく、授業の進度についていくことが難しい。

本来母語であるはずの中国語も、幼少の頃の帰国であるがゆえに忘れていることも多く、保護者とのコミュニケーションに支障が出ているケースもある。

帰国生のかかえる状況は以前とはかなりの程度変化してきている。初期の頃には基礎的日本語力の不足を補完するための日本語教育、授業の抽出・入り込み指導が中心であった。しかし、帰国年齢の低下もあり、日常会話の日本語にはほぼ不自由しない生徒が大半である。友達とのコミュニケーションもほとんど支障はない。しかし一見日本語に何ら問題がないように見える場合でも、授業を理解するレベルに達している帰国生は非常に少ない。

保護者は依然日本語が話せない場合が多く、帰国生が病院に日本語の通訳のため付き添ったり、市役所に様々な手続きに代わりに行っていることもある。一方家庭での会話は中国語にたよっている。この場合とくに編入時期の早い生徒は中国語の語彙が少ないため、親の話す内容の聞き取りはできても、自分の気持ちを中国語で表現できずもどかしい思いをしていることが多い。(世代間のコミュニケーションギャップの問題)

日本生まれの生徒についても、保護者は中国語しか話せないため、本来幼少期に習得するはずの日本語による擬音語・擬態語などの簡単な表現を知らないことが多い。また本格的な日本語の習得が幼稚園・保育園入園後にならざるをえず、以後の学習に影響を与えている。

国際化推進地域における体制の整備

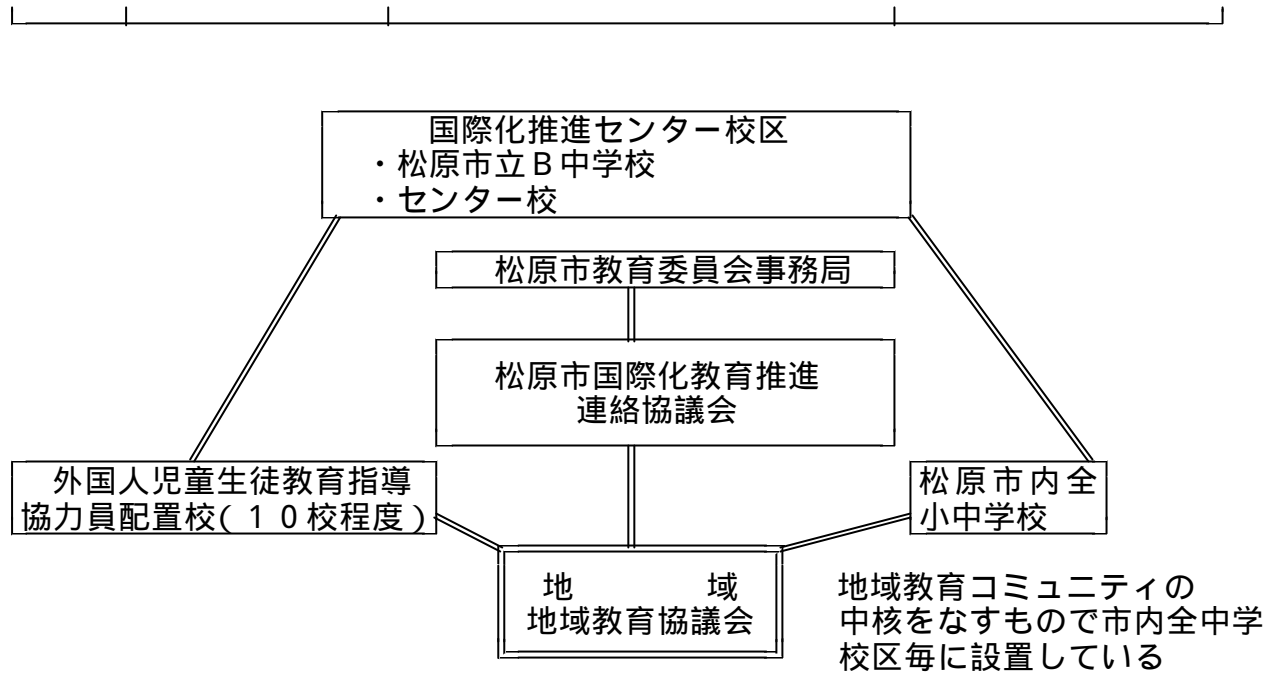
1. 教育国際化推進連絡協議会の概要

(1) 構成員及び各構成員の連絡協議会内における役割 (図等を用い、わかりやすく記述すること)

< 構成 >

(座長) 学識経験者
 (委員) 松原市立センター校校長
 松原市立A小学校長
 松原市立B中学校長
 松原市在日外国人教育研究協議会会長
 松原市地域教育協議会会長
 アジア協会アジア友の会代表
 関係各校担当教員
 松原市教育委員会事務局

役職	氏名	所属等	職名
座長		帝塚山学院大学国際理解研究所	教授
委員		センター校	校長
委員		松原市立B中学校	校長
委員		松原市立A小学校	校長
委員		松原市在日外国人教育研究協議会	会長
委員		アジア協会アジア友の会	松原地区世話人
委員		松原市地域教育協議会	会長
委員		センター校	教諭・事務局
委員		B中学校	教諭・事務局
委員		松原市立A小学校	教諭・事務局
委員		松原市教育委員会学校教育部	次長
委員		松原市教育委員会教育推進課	課長
委員		松原市教育委員会教育推進課	主幹・事務局
委員		松原市教育委員会教育推進課	主幹・事務局



(2) 協議会における活動内容

第1回松原市教育国際化推進連絡協議会

日 時 平成16年5月18日(火)

場 所 センター校

内 容 本年度の各校の課題について
本年度の活動課題について
提言 本協議会座長

国際交流キャンプ(松原市教育委員会主催)

日 時 平成16年8月5日(木), 6日(金)

場 所 大阪府立青少年海洋センター

〒599-0301

大阪府泉南郡岬町淡輪6190

目 的 体験活動を通じて、松原市内在住の中国帰国児童・生徒や在日外国人児童・生徒等の交流を図る。

参加者 松原市立小中学校児童生徒約90人

松原市立小中学校教職員 約40人

内 容 レクリエーション

語る会等

第2回松原市教育国際化推進連絡協議会

日 時 平成16年8月20日(金)

場 所 松原市民図書館集会室

内 容 全体研修会

【パネルディスカッション】

<テーマ>

「外国にルーツをもつ卒業生の思いや生き方に触れ、
これからの国際理解教育のあり方について考える。」

<パネラー>

B中学校卒業生

C中学校卒業生

<コーディネータ>

A小学校教諭

<指導、講評>

帝塚山学院大学教授

本研修会は、市内全小中学校に呼びかけ、約80名の参加者のもと実施。

事務局会議

日時 平成16年12月2日(木)
場所 松原市役所501会議室
内容 第3回連絡協議会について
今後の日程

第3回松原市教育国際化推進連絡協議会

日時 平成16年12月9日(木)
場所 センター校
内容 センター校研究発表会に向けた取り組みについて
各校の取り組みの交流

事務局会議

日時 平成16年12月24日(金)
場所 松原市役所501会議室
内容 センター校研究発表会について
今後の日程

第3回松原市教育国際化推進連絡協議会

日時 平成17年3月7日(月)
場所 松原市役所502会議室
内容 今年度の取組みの総括
実践報告
提言 「これからの課題」
帝塚山学院大学教授

2. 国際化推進センター校の概要

学校名：		担当教員氏名：			
TEL：		FAX：			
住所：					
HP：					
	帰国児童生徒	17人			
	外国人児童生徒	中国語	17人	その他	人
		語	人		人
		語	人		人
		語	人		人

該当児童生徒の主な母語別に記入すること

3. 国際化推進センター校での指導内容等

日本語能力	指導を開始し てからの期間	年齢	指導内容
日常会話 以外(教			5年生の児童については国語の時間(週5時間)の抽出指導を行っている。基本的に学級と指導内容を合わせ、教科

科学習等) も可能	12ヶ月 ～ 72ヶ月	6才 ～ 12才	書の語句の学習により重点を置いている。その他の児童については週1または2時間の抽出指導を図書の時間を利用して行っている。学年や個人、抽出の時間数によって微妙には違うが大まかには以下のような1時間の進め方をして いる。 5分間読書(図書の時間の抽出のため) 教科書音読その日の中心課題語句調べ(単元のはじめごろ) 日記・作文、社会・理科の復習(高学年) 学級から指定された課題 漢字の練習
日常会話が 可能	24ヶ月 ～ ヶ月	8才 ～ 才	国語教科書を用いた音読指導カタカナや漢字を中心にした文字指導自作の文作りワークプリントを用いての短文作りこれらを中心として上記の流れと同様に行う
日常会話が も困難	ヶ月 ～ ヶ月	才 ～ 才	

平成16年度の具体的な取り組みとその成果について
1. 研究趣旨を達成するために実施した活動及びその成果

日本語指導

- ・語彙の点検、獲得と短文づくりを結びつけて継続していく。教科書にでている言葉や擬態語、副詞を中心に宿題の中に必ず短文作りを出している。そのことと言葉を正しく理解しているか、使い方が間違っていないかの点検ができるとともに、間違えていたり、書けていないときは次の日本語教室の時間の課題にしていくことができる。
- ・教科書の音読と言葉の学習を必ず入れる。教科書は日本語指導としては必ずしも適切ではないが、週1時間の抽出であり、実際の国語の時間は教室で受けていることから教科書の理解がどうしても必要になってくる。そこで、単元のはじめにその単元での漢字と語句の学習をおこなっている。今年は市販の「教科書ぴったりテスト」(新興出版社)の漢字と言葉のまとめのページを用いた
- ・書く練習をしながらも漢字の読みを重点的に時間があまったら今までの学年からの漢字の読みを読んでいくことをしている。特に教科書に出ていた表現だけでなくその字を使った熟語などを読ませることをしていく。
- ・上手な文をかけるために段階をおった書くことの指導豊かな表現をできることが目標であるとともに、生活科や総合でも感想や発見など各場面が多い。詳しく表現していくことや、「
」の使い方など、また目的に応じた文など段階をおっていろいろなワークを取り入れて指導していく。
- ・子どもたちとの会話を話す力が本来の日本語でのコミュニケーションとして最も重要であるので、課題の消化にあせらず、いろいろな様子を聞きだすなど子どもたちとの会話をする心を心がけている

帰国・渡日児童のアイデンティティを高めていく取り組み

- 4月15日(木) 1年生を迎える会についての話し合い
- 4月28日(木) 1年生を迎える会
- 5月6日(木) 遊びを1年生に紹介しよう
- 5月20日(木) 切り紙
- 5月27日(木) 保護者交流会での出し物の話し合い
- 6月3日(木) 発表の作品作り(パソコン)
- 6月10日(木) 同上
- 6月17日(木) 発表の練習

6月24日(木)	夏の活動に向けての話し合い
7月8日(木)	成長さんの聞き取り
7月14日(水)	5・6年生キャンプ実行委員会
7月15日(木)	松東小との交流会
8月5,6日	サマーキャンプ
9月9日(木)	日本語力試しテスト
9月16日(木)	運動会中国語アナウンスの練習
9月30日(木)	今までのフェスタの踊りをビデオで見る
10月7日(木)	フェスタの分担を決める これ以後フェスタ終了まで練習
11月18日(木)	フェスタの感想、振り返り、掲示板的掲示物づくり
11月25日(木)	中国ゴマ
12月2日(木)	アトラクションでの分担
12月9日(木)	アトラクション練習開始 以後研究発表終了まで練習
1月27日(木)	朝会発表プレゼン分担
2月3日(木)	プレゼン作り
2月10日(木)	同上
3月	6年生とのお別れ会計画、準備、実施

今年度は研究発表会のアトラクションもあり活動の多くが踊りの練習に費やされた。そのため日本語教室の中でお互いのことを知り合う活動などが十分に取組めなかった。そんな中でもサマーキャンプの事前学習として聞き取りを行うことはできた。それぞれの活動につなげる学習の部分を計画的に取り組む必要がある。また今年度は指導協力員として帰国生の先輩と一緒に活動に入ってもらった。だんだん子どもたちも慣れてきているいろいろ話しかけるようになってきている

中国語の学習

児童は中国語に関して簡単な会話しかできなくなってきており、そのことでの寂しさを感じる保護者も多い。中国語の学習は高度な会話を学習というよりもピンイン(中国の発音記号)を学習したり簡単な文が読めるようになっていたりなど、その子らのこれからの意欲や中国語を大切にしていこうという意識に結び付けていきたい。

また、このことを通じて家庭での練習など親子でのつながりを深めていくものになっていければと期待している。

火曜日の6時間目に1,2年生 放課後に 3年生以上

教材は中国での子ども向けの初級の教科書をマスプリして使用。

指導内容として1,2年生にはピンインの学習、3年生以上については簡単な文章を読んでいくことをおこなった。

学級・学年との連携

1年生については例年通り、学校探検の中で日本語教室訪問を行った。

2年生については春節祭の取り組みにむけて日本語教室の仲間を知ろうという中で放課後の活動への見学を行った。

3年生については学年としてではないが、フェスタで中国ゴマを取り組むにあたってその練習を日本語教室でも休憩時間に子どもたちがおこなった。渡日児童理解の一つとして交流や見学、国際理解教育の日本語教室での出前授業など取り入れていきたい。各学年の計画にあわせて合同で家庭訪問を行ったり、教材の用意、通訳の確保ができた。中国のことを理解する内容で指導協力員の方からお話を聞いたり、自分の体験を聞き取りしたりなど指導協力員の関わり方も多様になってきた。今後も学年の計画をもとに支援できる体制を整えると共に計画段階での協力も深めていきたい。

保護者との連携

4月 家庭訪問

5月15日 保護者会(交流会に向けての打ち合わせ、就学援助について)

6月20日 保護者交流会

7月 個人懇談会

7月 日 保護者会(夏祭り打ち合わせ、1学期をふりかえって)

8月28日 夏祭り

10月 日 保護者会(フェスタ打ち合わせ、研究発表会に向けての取り組みへのお願い)

11月12日 フェスタ準備(餃子作り)

11月13日 フェスタ

12月 個人懇談

3月 4日 日本語教室保護者教育懇談会

年間を通して保護者会を持つことができた。1学期の交流会、2学期の餃子作り、3学期の教育懇談会はほぼ全ての日本語教室保護者の参加があった。毎月の学校だよりの中国語訳とともに1年生の学年だよりについては必ず中国語訳を発行した。また教育活動に関わっての依頼の家庭訪問については指導協力員の方と協力しておこなえた。

2. 本事業担当教員の国際化推進地域内の教育体制における役割及び活動状況

担当教員の主な活動状況

帰国・渡日児童生徒担当教員を、校内運営委員会のメンバーとして全体的な方針を出す校務分掌に位置づけている。また、担当教員は、実践的な面においても、校内での取組とともに校区連携、地域連携の要としての役割を担っている。具体的な役割として以下の職務があげられる。

(担当教員の役割)

- 日本語の微妙な表現や外来語、日本文化に関わる言葉等、渡日児童に十分理解できない言葉を細かく指導し、理解を促す。
 - 学級の児童等との感情的なもつれやトラブル等、帰国・渡日児童が自分の思いや感情を十分に表現できないときに、その思いやトラブルの原因等をつかみ、担任と相談し、学級集団の取り組みとして解決を図る。
 - 中国の遊び大会やフェスタの文化発表等を通して、日本語教室の活動を全校に広げる。
 - 中国語の学習や放課後の全体活動などを通して日本と中国の2つのルーツを持つ豊かな人権感覚やアイデンティティを育てる。
 - 学校からの通知文や保健関係の書類、通知票等を中国語に翻訳(市派遣通訳と協力)し、帰国・渡日保護者の学校への理解を図る。
 - 帰国・渡日保護者が学校の取り組みを理解し、学校行事への参加を促すため、家庭訪問や渡日保護者会等で連携を図る。また、入学説明会、懇談会、入学式、卒業式等、様々な学校行事で通訳の手配をする。
 - 教職員が帰国・渡日保護者の思いを知り、交流を深めるために「渡日保護者交流会」や懇談会を中心的に担う。
 - 国際交流キャンプ等で、中学校・高等学校と連携し、先輩の生き方に学ぶ取り組みを進め、帰国・渡日児童が将来に対し、夢や希望が持てるようにする。
 - 松原市在日外国人教育研究協議会と連携し、多文化共生教育の発展に協力する。
 - 教材づくりの工夫について
 - ・日本語での表現力を高めることとして主に作文の指導の学年ごとのめあてを明確にする
 - ・語彙をふやすこととして教科書の言葉を用いた短文作りなどを毎日の学習に取り入れる
 - ・文字の獲得として既習の漢字についての復習プリントの作成、整理をする
 - ・他教科との関連を考えた語彙指導を行う
- 学力保障(授業・定期テスト前・長期休業中)・・・教科担当や学年の教職員と連携しておこなう。また各学期ごとに帰国・渡日生学力保障会議を開く。
進路保障・・・進路担当と連携しておこなう。
三者懇談・3年進路懇談・家庭訪問への参加と通訳の配置
年度当初に校内国際理解教育の方針を出す。
年度末に校内国際理解教育の総括をおこなう。
国際理解教育に関わる校内研修の企画・立案をおこなう

本事業担当教員は指導協力員の連携によって、抽出授業、または、授業への入り込みを行っている。また、放課後に指導協力員とともに、日本語・中国語・教科の補充

を行っている。

学年会議、職員会議、校内研修などを通じて、生徒の様子や学力実態について常に情報を発信し、意見交流を行っている。学期末時には「帰国・渡日生学力保障会議」を開き、帰国・渡日生の学力保障について総括と来学期の方針を出している。また通知票の文章表記及びその中国語訳を作成し、保護者および生徒により詳しい学習達成状況を知らせている。

日本の学校制度がわからない保護者に対し、「帰国・渡日生対象進路説明会」を開くなど進路情報の啓発にもつとめている。ともすれば保護者は「言葉の壁」により、地域の中で孤立しがちになる。こうした問題を防ぐため、「帰国・渡日生保護者会」を年間数回開き保護者どうしのつながりをつくっている。

また中国語訳も含めた「日本語教室通信」を毎月発行して保護者への情報の伝達につとめている。

日本語指導担当者は放課後の家庭訪問も随時おこない、生徒の学力へのサポートを行うとともに、生徒の生活の基盤である保護者の生活のサポートも行っている。例えば、PTAなどの集会在地域で行われる際には、日本語指導担当者がその集会に出て、保護者のサポートをしたり、緊急の病院への対応などもおこなう場合もある。

多くの帰国・渡日生徒の帰国・渡日時期が幼少期であるゆえに、中国語を忘れている。また中国語による作文、文章の読解ができない帰国・渡日生が大半である。この様な状況に対応し、日本語指導担当者は指導協力員と連携し、放課後の母語(中国語)保障もおこなっている。

そのほか日本語指導担当者は帰国・渡日生のアイデンティティー確立のため、中国語を学ぶ機会のほかに日本語教室の卒業生や、外国にルーツを持つ先輩の話聞く機会を設けたり、中国の文化に触れることのできる取り組み(たとえば水餃子づくりなど)を企画し、実施している。

センター校における担当教員の時間割

	月	火	水	木	金
1	2 - 1	A	A		5 - 2
2	A	4 - 2	3 - 1	5 - 2	2 - 1
3	5 - 2	1年	1年	2 - 2	1年
4	2 - 2	1年		A	A
5	府外教	5 - 2	5 - 2		
6		中国語 (低)		6年	チャレンジ
放課後		中国語 (高)		全体活動	

1年
については入
り込み、3学
期より火曜水
曜の3限に抽
出開始

3. 本事業担当教員以外(民間企業、地域の団体、人材等)の活用状況 (センター校の状況)

1年生の生活科の学習で、中国帰国保護者には中国の民話や遊びを、阪南大学の紹介による韓国からの留学生や八尾市のトッカビ子ども会の指導員の方からは韓国についての話や遊びを、また地域の高齢者から日本の伝承遊びを教えてもらった。

2年生では、1年生と同じく中国帰国保護者から中国の遊びや餃子作りを行った。

4年生ではアジア協会アジア友の会の話や学年で聞き、体験活動を行った。

5年生では日本の伝統として地域の神社に伝わる順行太鼓を地域の方から教えてもらい、また、労働の学習の中で中国帰国保護者を始め、保護者の中から外国で働く人の聞き取り、指導協力員から外国からきて日本で働くということについての聞き取りを行った。

6年生では卒業生にあたる帰国生徒や指導協力員として関わっていただいている大学生から先輩の話として聞き取りを行った。またこれらの取り組みを含め、松原市

の指導協力員制度の中で、聞き取り、料理交流、通訳としても授業の中に参加してもらっている。

これらの取り組みは今年度だけでなくここ数年の積み重ねの中で定着してきている。

(センター校以外の小学校の状況)
アジア協会アジア友の会松原支部

アジア協会の紹介で、Dさんから聞き取りをした。アジア協会では、緊急にアジアスマトラ島沖地震の募金活動をする事になり、6年生も書き損じはがき集めを通して、協力することになった。目標の1000枚達成したときには、歓声があがった。2月初旬には、ガッツだ集会で、アジア協会を通じて贈呈した。

日本語教室担当より渡日生の話をしてから、「大地の子」(プロジェクト)を鑑賞した。そして、卒業生で渡日生のNさんから聞き取りをした。言葉が通じなくて、なかなか仕事が決まらないお父さんの就職活動に通訳としてついていった日のことなど、生い立ちとともに日本と中国の違い、今、大学生としてがんばっていること、将来の夢など、やさしくわかりやすく話してくれた。

四年生の社会科で、大阪と世界とのつながりの学習から発展して、外国について調べ学習をした。この学年の保護者で中国から来られたAさんに聞き取りをした。この学習で、何よりよかったことは、Aの反応である。お母さんが学校に来てくれてみんなに中国のことを一生懸命話してくれたことは、Aにとって、とてもうれしいことであったようだ。どちらかというとな発表が苦手だったAが、それ以後、積極的に手を挙げるできるようになった。まわりの子どもたちにとっても、Aをより身近な存在に感じられるようになった。この学年の子どもたちにとっては初めての取り組みだが、つながりを作っていくことの大切さや、ちがいをあたりまえのこととして認め合っていくきっかけになったと思われる。

総合学習のなかで、国際理解教育につなげて、中国の食文化に触れようと、「水ぎょうざ」の作り方を渡日児童の保護者に実演して頂いた。

日本語教室のあるセンター校の2年生と交流を持った。まず、顔合わせとしてテレビ会議を行い、C小からは1学期に学習した国語「スイミー」の大型紙芝居の上演をした。子ども達が考えたセリフのおもしろさに聞き入ってくれた。センター校からは、中国語でのあいさつや歌、3学期に行う「春節祭」についての説明や招待のよびかけがされた。3学期に2回に分けて「春節祭」に招待され、参加させてもらった。本物そっくりに作った食べ物や紙で作ったきれいな中国服、中国の遊びなど、子ども達は中国のことについて楽しみながら学習することができた。

支援通訳の先生から、中国語の挨拶を教してもらったり、中国語で「落ちた落ちた」の遊びや「キラキラ星」の歌を歌ったりした。また、二胡の演奏をしてくださった後、実際ひとりずつ二胡を弾かせてもらい楽しく異文化交流をすることができた。

アドナン先生に、イギリスの生活や文化に触れていただきながら、ゲームや歌などの活動を多く取り入れ、自分の事を表現できる力を身につけたり、ものおじしない豊かな国際感覚をもてるように、素地を築いている。

(センター校以外の中学校の状況)

松原市派遣の指導協力員があげられる。日本語指導担当者は指導協力員の連携によって、抽出授業、授業への入り込みを行っている。また、放課後に指導協力員とともに、日本語・中国語・教科の補充を行っている。また通知票の文章表記及びその中国語訳を指導協力員と連携して作成し、保護者および生徒により詳しい学習達成状況を知らせている。また日本の学校制度がわからない保護者に対し、指導協力員と連携して「帰国生進路説明会」を開くなど進路情報の伝達にもつとめている。ともすれば保護者は「言葉の壁」により、地域の中で孤立しがちになる。こうした問題を防ぐため、「帰国生保護者会」を年間数回開き、教職員および保護者どうしのつながりをつくっている。この保護者会にも指導協力員にかならず参加してもらい、お互いの意思の疎通を図っている。また中国語訳も含めた「日本語教室通信」を、指導協力員と連携し毎月発行して保護者への情報の伝達

につとめている。放課後の家庭訪問も随時おこない、生徒の学力へのサポートを行うとともに、生徒の生活の基盤である保護者の生活のサポートも行っている。例えば、PTAなどの集会在地域で行われる際には、日本語指導担当者がその集会に出席して保護者のサポートをしたり、緊急の病院への対応などもおこなう場合もある。この際にもかならず指導協力員に参加してもらい、保護者に情報が正しく伝わるように配慮している。

多くの帰国・渡日生徒は帰国時期が幼少期であるゆえに、初歩的な中国語しか身につけていない。また中国語による作文、文章の読解ができない帰国・渡日生が大半である。(中国では母語による教育を受けていない)このような状況に対応し、指導協力員と連携し放課後の母語(中国語)保障もおこなっている。

帰国生のアイデンティティー確立のため、日本語教室の卒業生や、外国にルーツを持つ先輩の話を書く機会を設けたり、中国の文化に触れることのできる取り組み(たとえば水餃子づくりなど)を企画、実施している。このような取り組みにも指導協力員に参加していただき助言・指導をお願いしている。

多文化共生教育・国際理解教育をすすめる教職員のネットワーク組織として、松原市在日外国人教育研究協議会(市外教)がある。公開学習会(8月)、府外教進路フォーラム(12月)への参加、実践交流会(2月)など在外外国人教育にかかわる研究活動を行っている。本校としても市外教の活動に積極的に参加している。

松原市教育委員会主催の国際交流キャンプ(8月)は、市内小中に在籍する外国にルーツを持つ児童生徒とその仲間が集まる。(約70名)本校からもほぼ全員の帰国生とその仲間、多くの教職員が参加している。昼間は飯ごう炊飯、水泳などの自主活動、夜は先輩からの聞き取り、ミーティングなど市内の外国にルーツを持つ児童生徒どうしが、お互いに交流を深めアイデンティティーを高める場となっている。

関西ネット主催の子ども作文コンクールに、毎年作品を応募している。作文には帰国生の日本に来たときの気持ち、日本での生活、保護者に対する思いなどが素直に書かれており素晴らしい内容である。

4. 3で活用した企業、団体、人材等の概要

アジア協会アジア友の会松原支部

市内各小中学校卒業生

渡日児童保護者

松原市日本語指導協力員(支援通訳)

A L T 指導員

株式会社ヘレニズム

松原市在日外国人教育研究協議会(市外教)の概要

市外教...松原市内教職員による多文化共生教育・国際理解教育をすすめる教職員のネットワーク組織

年間活動概要

- | | |
|-----|--|
| 5月 | 役員会(03年度総括と04年度方針について)
総会・事務局会(03年度総括と04年度方針・活動予定について) |
| 6月 | 府外教研究集会に参加 |
| 7月 | (松原市国際交流キャンプにむけての打ち合わせ) |
| 8月 | (松原市国際交流キャンプ参加)
松原市教育国際化推進連絡協議会 研修会(市内中学校卒業の帰国生によるパネルディスカッション)への参加
専門部会(各校の取り組み交流など) |
| 12月 | 第8回「府外教南河内地区進路フォーラム」 |
| 1月 | 平成15・16年度文部科学省委嘱「帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域事業」センター校指定研究発表大会(センター校)への参加 |
| 2月 | 実践交流会打ち合わせ会(報告者・司会者)
実践交流会テーマ
『人との出会いを大切にしたい国際理解教育～ちがいで学び、つながりあえるてがかりとは～』 |

3 月 専門部会(04年度総括)
役員会(専門部会の総括を受けてのまとめと来年度の課題)

関西ネット(全関西在日外国人教育ネットワーク)...大阪府在日外国人教育研究協議会、奈良県外国人教育研究会、兵庫県在日外国人教育研究協議会、在日外国人教育を考える会・滋賀、全朝教京都の5団体で構成。

5. その他特筆すべき平成16年度の実績及びその成果と課題

平成15, 16年度文部科学省委嘱

「帰国・外国人児童生徒とともに進める教育の国際化推進地域事業」研究発表会の開催
(詳細は、別添資料参照)

テーマ

地域・未来・ともに歩む
～多文化共生の町づくり・学校づくりをめざして～

日時 平成17年1月23日(金)

会場 センター校

内容 全学年公開研究授業

全体会

講演 「地域に根ざした国際理解教育の展開」

講師 帝塚山学院大学教授

センター校の状況

多文化共生を柱とした国際理解教育についての職員研修の実施

全学年全学級の公開授業を含めた研究発表会の開催

センター校の取り組みをまとめた冊子「研究の概要」発行

これらの取り組みを通して、

- ・帰国渡日の家庭、日本語教室児童の実態の現実認識の深まり
- ・地域と結びつく足元からの国際化の重要性の再確認
- ・多文化共生を核とした国際理解教育の推進 人権の課題と結びつけて
- ・グローバルな課題も含めた広い視野を持ち地域で活躍できる子の育成の課題

が教職員全体のものになった。

以下に、各学年の成果と課題をまとめる。

- 1年生 園児と児童の豊かな関わりができた。
聞くこと言うことの力の育成、学習への参加の中での保護者のつながりが課題として挙げられる。
- 2年生 C小との連携、テレビ会議、ゲストティーチャーなどによる意欲の喚起ができた。日常の生活へのつながりが課題として挙げられる。
- 3年生 調べることの楽しさを味わうことができた。相手の立場に立つというスキルを含めた態度が課題として挙げられる。
- 4年生 学習や体験から自分の意見を持つことができた。自分たちの考えを深め発展させていく活動が課題として挙げられる
- 5年生 地域の温かさや家族のすばらしさへの気づきができた。共感的に受けとめる力をつける日常の活動との接点が課題として挙げられる。
- 6年生 夢や目標を考えるにあたっての人の生き方や思いへの出会いができた。広い視野の育成が課題として挙げられる。

センター校以外の状況

(小学校)

日本語教室の存在や意義が児童に理解できるように、学年と連携しながらとりくんだ。

一年生の生活科の学校探検で、「日本語教室」の見学も行い、その後、日本語教室の紹介を通じて、「きらきら星」を中国語で歌ったり、「十二支の物語」をペープサートで上演し、中国の民話に親しむことができた。後日、生活科と関連して、中国ごまや朝鮮半島のごま(ペンイ)で遊んだりして交流した。学年の児童が、中国を身近に感じ親しみを持つことで、帰国児童が安心して通級できている。

二・三・四年生とは、支援通訳の先生の協力を得て、異文化交流をした。中国語を使って、中国語(漢字)のクイズや「おちた・おちた」「マクドナルドゲーム」のマスゲームを行い、「きらきら星」「鉄腕アトム」を中国語で一緒に歌った。「一年の時、日本語教室で歌ったから、知ってる。」と声があがり、元気よく歌ってくれた。また、中国の楽器の二胡の音色を聞かせて頂き、「世界に一つだけの花」を一緒に歌った。

四年生は、中国のお正月の様子(春節)について聞き、お祝いの様子を知った。

五年生は、満蒙開拓と少年たちを描いたアニメビデオ「蒼い記憶」を学年で見て、時代背景を知った。その折、帰国された校区のおじいさん・おばあさんの事やIさんの祖父の事を伝え、今へのつながりを知ることができた。

六年生は、NHKプロジェクトX「大地の子日本へ」のダイジェスト版を見た後、Tさんの聞きとりを伝えました。戦争が残した傷跡や残留孤児について知った後、卒業生のNさんに、帰国当時の生活やなかまの事などを聞きとりしました。Nさんのおばあさんの聞きとりの感想を事前学習し、厳しい生活状況のなかで、Nさんが家族を支えた優しさとなかまへの思いを聞くことができた。

(中学校)

多文化共生教育に関わる人権総合学習

(成果)

中学1年学年総合の時間に、中国残留孤児・婦人について取り上げたビデオ『蒼い記憶』を鑑賞し、この課題についての知識と理解を深めた。また2年学年総合の時間に「労働の国際比較」として日本における労働者の「過労死」と発展途上国における「児童労働」の問題をとりあげた。

(課題)

地域に中国からの帰国者がおられる経緯よりも、戦争そのものの悲惨さに生徒の視点が置かれてしまい課題が広がりすぎ、今一步中国帰国者に対する深い理解にはいたらなかった。

多文化共生をテーマにした総合学習づくり

国際ボランティアに取り組みむ人たちや外国にルーツを持つ人たちのお話を聞いたり、「World Studies」新聞(生徒が自分の興味のある世界国々の文化・生活について調べ新聞にまとめる)づくりに年間を通じて取り組んだ。

(成果)

生徒の多文化共生、異文化理解をすすめることができた。(生徒の感想文から)「ブラジルのことはあまり知らなかったけど、今日のお話を聞いていろいろなことを知ることができました。(中略)私は勉強できる環境だけど全然してなくて、今回のお話を聞いて(ブラジルには)勉強したくても(家族のために働かなくてはならないので)できない人がいるのを聞いて驚きました。」

(課題)

聞き取り講師をさがすにあたり、たくさんのボランティア組織(NPOなど)に依頼したが毎回苦労した。関係諸機関との一層の連携が必要である。

6. 平成16年度の成果と課題に基づく今後の課題

地域に根ざした国際理解を一層進めるために

- ・一人ひとりの個に応じたきめ細かな対応
- ・保護者との強い結びつき
- ・児童自らのアイデンティティをつかみとる取り組みの推進

各校における個性的な取り組みの普遍化をめざしたネットワークの構築と関係諸機関との連携の強化

多文化共生教育と国際理解教育との関連を深め、地域での学びをグローバルな学びにつなげる実践の推進

総合的な学習を中心としたカリキュラムの組み立てと学習の展開と学習方法の一層の研究

教職員間における課題の共有化